

宝暦・天明期津軽藩農村の諸問題

滝 本 寿 史

はじめに

幕藩制社会における宝暦―天明期のもつ意義については、諸先学によって多くの指摘がなされ、個別藩政史研究においても、改革前提期としての重要性から、当該期の研究は厚い蓄積をもっている。

これは、藩政改革が階級支配の変質・動揺への対応であり、従って、基礎構造を中心とした社会変動の集中的表現への対応であることからくるものであるが、これを津軽藩について見たとき、研究史的蓄積がほとんど見られない。

このことは、津軽藩寛政改革研究にも直接反映しており、単に政策内容の概略的把握のみにとどまり、従来指摘されてきた、備荒貯蓄、藩士土着、藩校の創設という三大政策も、背景や実態分析の希薄な政策論に陥っている観がある。しかも一政策完結の研究であるために、政策後の藩政の動向や社会的変動にも連続し難く、寛政期そのものが他の時期から浮きあがってしまう危険性を孕んでいる。

この期の分析は、後に続く解体期研究にとっては不可欠のものであり、特に津軽藩では、改革期に惹起してくる北方問題の藩政への影響を考える時、寛政期の動向は幕末まで強い規制力をもってくる。

本稿はその意味で、宝暦―天明期における藩政の課題を明示すること

を重要と考え、その体系化の中に寛政改革の諸政策とその後の藩政を展望しようとしたものであり、今回は特に収奪基盤に着目したものである。同時に、津軽藩基礎構造研究の一布石になればと考えている。

藩政を一貫してとらえ、各期の総体的位置付けを行うことは、特に津軽藩政史研究において急務とされる研究課題である。

※本文中の付表a～iは本文末に一括して掲げた(編集委)。

一 宝暦―安永期の状況と領主的対応

(一) 農村状況

当該期の農村状況を、安永三年、平田森村庄屋から大光寺組代官への書上である「大光寺組平田森村当戸数人別増減調帳」^①によって検討したい。これによれば、「百姓」、「高無」、「日雇取」の三階層に人別把握がなされている。これらの明確な区分規定を行う材料はもちあわせないが、津軽藩特有と思われる、農民の「高無」記載を中心にこれらの諸関係を追ってみると、次の各点が指摘される。(表a～c参照)

(1) 「百姓」↓「高無」↓「日雇取」という没落傾向が見られること。

(2) 「高無」層の再生産は、上層農と小作関係に入ること、及び家内労働力を居村・他村へ奉公に出すことによって行われていること。

(3) 従って「日雇取」↓「高無」↓「百姓」という各層の上昇転化は難しく、階層構成は両極分解の方向に向かうと考えられること。更に、

「高無」層が「日雇取」層の析出基盤となっていること。

(4) 「高無」の一性格として、「百姓」からの分家がその層に属していること。

(5) 「百姓」、「高無」がその基盤を土地に有しているのに対し、「日雇取」は生産手段を持たない全くの賃稼ぎであること。

(6) 「日雇取」が、屋敷に関して「明屋敷」として記載されること、及び五人組編成が村内における屋敷所持者によって構成されていることから、「日雇取」としての人別把握は、本来一致していた土地把握の形骸化の中に位置付けられること。つまり、これが天明飢饉後の労働力不足への対応として出された人返し令の根拠となっていること。等である。

以上の各点より、中後期の農村は、上層農、特に村役人層を分出している層によってその全体的把握がなされる状況にあったと考えられる。「日雇取」層は、その析出基盤である「高無」層によって把握され、「高無」層は、その再生産を上層農に依存していることから、また本家―分家関係からも上層農によって把握されうるからである。

この傾向が宝暦以降の現象であることは、大光寺組大光寺村芳賀家にある九五通（明治以降は除く）の金借証文等の残存状況から読みとることができる。表dは、このうち土地移動に直接かわりをもつ永代売買証

文・質地証文の八三通を年次別に示したものであり、明和―安永期が芳賀家の土地集積のピークに達していることがわかる。表aでは長五郎に具体的に示されている。つまり、「昨年（安永二年―引用者、以下同）迄所持之処、居村長八に譲渡」し、その結果翌安永三年は「当作」としてその土地の耕作に従事しているのである。

ところで、このような土地譲渡、小作人化による「高無」、「日雇取」層の増大傾向は、当然のことながら百姓数の減少を導いていくことになる。時代は下るが、文政二年赤田組板柳村の「書上」^③では、戸数二三軒のうち、「高無」一七一軒、「日雇取」五〇軒、残り二軒が医者という状況を呈している。地方割についての記載ではあるが、「御蔵百姓茂不足ニ罷成候」^④という藩当局の認識が、農村における本百姓体制の現実的崩壊の中で中後期以降深刻化してくるのである。

次にこの期の農村状況において注目しておきたいのが、他村への越石高の大きさである。^⑤これが分家に特徴的に見られるのは、土地の分散を防ぐための措置であると思われるが、結局の所、他村との出入作関係、土地移動が広範に行われていることを示すものである。「板屋野木安田次郎兵衛所々より田地多受取置候」^⑥などはそのよい例であるが、先にあげた芳賀家の金借証文の内容にも表れており、むしろ他村からの借用申込みの方が多い。^⑦

以上より中後期農村状況を次のようにとらえたい。即ち、一村における小数の肥大化した百姓と増大化していく下層農・日雇取層の関係が、一村を越えて広域化していく中で、百姓数の減少が現実化していく状況である。しかもこの増大化した下層農、日雇取層は、それぞれ小作、仮

(借) 子として一部の上層農民の中に組み込まれていくことで再生産していくという構造が、一層この傾向を拡大している。

ここに、長期的な百姓取立と暫時的な上層農による農民支配が、中後期農村状況を背景としたこの期の津輕藩政の課題として設定されるのである。

(二) 収奪強化と農村

次に、藩政レベル、特に農政における藩の動向からこの期の課題とその内容を探ってみたい。

安永九年七月、藩主は郡奉行三人を呼び寄せ、近頃の百姓について次のような「御断」をしている。^⑧

……在所は辺土の事無調法にも正直ニ可有之事、何れ我身の事を不
思者ハ無之候、然者あまり思ふニ付過し却而身ヲ失ふもの多し、
田畑の作物をぬすむの、山中盗柚の、海辺隠し津出しのといろ／＼
の悪事をなす事、上方西国辺にはあまり沙汰のなき事、……領内の下々
他国より風俗悪しき……亦あしき風俗人の善事を疾ミ田畑の作物を
初め明山に木を植付、又ハ明地に作物を植付る事を嫌へ、いろ／＼
ひなを申触、甚敷事は夜中あらし置杯言語同断不届なる風俗なり、
たとへ己れ暇なく致兼る事は人に我地をあたへ頼んで成共作徳をと
らせ、人の喜は我善と思ふ風俗にありたき事、左程までなく共人の
なす事に妨邪摩^マをなす事に至らんや、……其方共は領内の百姓を下
知する役なれば、自分の一類共召遣ひ共思ひ朝夕心を用へよ、然ハ代
官其次庄屋共も少しは欺き偽る事を恥ん、予人を偽り欺の事を幼年

より嫌ふとしりたる者も近習にはあらん、然は予が嫌ふ事大方国の
風俗と見ゆ、……此事書付而秘するに及ハす、其方共より申聞せて
能事は下々申聞せて不苦、当年の事あまり興さめ腹の立儘に申聞せて
ここにみられる藩主の憤慨は、既に明和八年五月の徒党門訴に関する
村触^⑨や、安永三年五月の五軒組合(五人組)についての再触^⑩にも示され
ているが、このような農民不正に対する藩権力の動向は、様々な形で
収奪強化に向かうものであった。

このこと自体は、五代藩主信寿(享保期)以降の新田開発の頭打ちと、
藩財政の極端な江戸・上方資本への依存^⑪(蔵元からの廻米強制)が直接
の原因と考えられるが、この時期改めて農民不正を根拠として収奪強化
が志向されることは、階級矛盾の進展という点において、前途の農村状況
を背景とした農民の困窮化と深い関連を有していると思われる。これは、
この期の農民不正が特に「隠(開)田畑」及び「田畑地広」という形で
示されている所に明確に表れている。しかもそれが、「木造金木俵元三
新田之者共段々致隠田候^⑫」とか、「田畑地広御詮義……去年(明和八年)
も浪岡組目鹿沢村にて百姓共入牢被付仰候^⑬」とあるように、村ぐるみの
不正として、あるいは、関連百姓連合の不正として表面化しており、こ
の期の農政を緊迫化していると言える。

しかし結局の所これらの摘発は、「貪利巧訴の分別を止、勸善懲惡の
心を可相守者也^⑭」という儒教倫理の押し付けにとどまらざるをえず、ま
た「右隠田畑作り取被仰付候^⑮」とか「銘々抱地ニ結ふ^⑯」とあるように、
その収奪基盤への取り入れが限界であったと思われる。むしろ、「地広
の分は下々田ニはかり被仰付候様役方衆も咄合にて、百姓共其心得にて

夫々書上候処、帳面御返の上其抱々の儘相当を以書上候様被仰付候、右ニ付上田計の田地広も上田にて有之候^①という藩のかけひきは、「其田畑の元位ニ随ひ位付被仰付、所に寄り過半地広出候百姓潰に及申候^②」という具合に、収奪基盤の変容に拍車をかける結果となったのである。

次に、この収奪強化を農民負担の増加という視点に立って考えてみたい。

へゆるぐともよもやますの三斗米

今の役人あらんかきりは

これは、明和三年の大地震の際「拾石三斗米退散の歌」として「愚民の門戸之地震の禁祝と張置^{まじない}」かれた落首である。この「拾石三斗米」は、正徳四年、「御蔵百姓並給地寺社共に高拾石ニ付三斗宛過上納被仰付^③」

として出されたのが最初である。しかしこれが一年限りの「過上納」となっているのに対し、明和三年の落首に歌われたものは、宝暦八年以来の継続化した「過上納」である点に注意しておきたい。更に、どちらも家中からの借上と同時に触れられていることは、家中借上の恒常化が「過上納」の継続をもたらしたとも考えられるのであり、総体としては家中借上を百姓からの「過上納」によって軽減していたとも考えることができる。即ち変形した年貢増徴策であるとともに、家中借上に適用した公の論理を農民にまで及ぼした負担転嫁であると言えるわけである。年貢収納量固定化の中での収奪強化策と思われる。

さて、このような負担転嫁の意味する所は、年貢米・小役米の増徴という点において既に困難な状況に農村が立ち入っていることを示していると考えられるが、その生産性の限界は、一方では農民の困窮化の方向

をも導いていることは言うまでもない。さらに、中期以降の米価下直、諸色高直という全国的経済状況の中で、貨幣経済の中に組み込まれた藩財政もまた次第に窮乏化の道をたどることになるが、個別農民レベルにおいてもまた、豊作↓米価下直↓百姓難儀^④という一連の展開がみられることになり、津軽藩では宝暦以降この傾向が顕著になっている。安永三年十一月、郡奉行に産業開発を下命し、同四年領内廻郷産物方を設置して組毎に七七八人ずつ任命したのは、この傾向への対応として商品作物の開発を企図したからである。ここに、年貢収納量の限界を前提として貨幣経済の浸透に対応した、藩財政基盤拡大への志向性を窺うことができる。つまり、「御領内の義ハ米穀一産にて外ニ重立候産物無之^⑤」津軽藩の課題がこの時期設定されたのである。

(三) 「郷土制」の展開

これまで指摘してきた課題遂行は、第一節で述べた農村状況を背景として、極めて上層の農民を軸として行われていくことになる。いわゆる郷土身分への登用と、彼らを諸役職に任命することによる農政の展開である。つまり、極端に両極分解に向かい、かつ農民の再生産が上層農の一村を越えた土地所持の中で行われていく中後期農村状況の中で、一村単位の農政から、数ヶ村ないしは組単位の農民及び土地把握が必要となってくる。郷土という中間的身分の新たな設定は、彼らを、代官―村役人の中間に位置させることによって、農政単位の広域化に対応させるとともに、「常々右五ヶ村（五所川原、猫淵、湊、長橋、喰川村）之内、両人（五所川原郷土原庄右衛門、飛鳥三九郎）の世話に不預者五人なら

で無之^⑤」という数ヶ村を見通した形での農民扶助がその実態に即して意図されたものと言える。

まず、この「郷士制」は宝暦五年から同一一年にかけて大庄屋制として展開する。

○同月（宝暦五年三月）諸組代官不残引取七人ニ成る。

（中略）

○同時在々重立の者廿四人（追加三人都合二十七人―引用者）表数五拾俵宛被下置候て御目見已上にて大庄屋被仰付、是迄の代官所務致候、

（中略）

右之族皆町人百姓にて是迄の代官之門え拝履^ぐし一向無刀の所今日俄に士と成……其威是迄之代官に十倍す、弘前の名主会所をかりて寄合所とす、月々上弘して加談ス、……

○諸組手代村々庄屋五人組共不残引取にて……大庄屋の目鑑次第申立村毎に手代と言を立是迄の庄屋之所務を致ける、手代の下を手付として是迄の五人組の所務いたし也、

○代官は鎗立廻郷ス、是迄の郡奉行ニ均しき威勢にして尾上、油川、本作三ヶ所ニ代官役所相立、

○六月大庄屋被仰付候者の外、重立の者え去戌年（宝暦四年）より御運送加談と言役職町在百人余有テ金銀米銭の御用を勤る、果して大庄屋格と成テ大庄屋列序す、其威大庄屋と均しけり、^⑤

従来、郡奉行―代官―庄屋―五人組体制から郷士身分の設定によって、郡奉行―代官―大庄屋（―運送方）―手代―手付体制に藩の農政機

構が変わったことが示されている。特に注目したいのは、手代、手付がこれ迄の庄屋、五人組の業務を受けつぐものの、それが「大庄屋の目鑑次第申立」によって設置された点であると思われる。つまり大庄屋の支配単位が農政単位となっている点である。しかも大庄屋の内容が「在々重立の者」であり、日常的に農民の再生産に大きくかわっていることと、大庄屋格としてのこれも「重立の者」である運送方が、翌宝暦六年一〇月に蔵奉行に任せられていることとを考え合わせるならば、郷士層に年貢徴収とその請負をも任せたとしたことにもなる。其威是迄之代官に十倍す」とは、藩の農村状況に対応した年貢収奪の貫徹が大庄屋の実態を背景としたものであったということを如実に示している言葉である。

さて、宝暦一年の大庄屋引取り後も、より農村と密着した方向で「郷士制」が展開されていく。

……大庄屋の時分ト郷士大庄屋と有之、大庄屋引取候得共郷士ハ其儘にて罷有候而其後段々在方重立の者江郷士被仰付、此節（安永三年）迄七拾人余有之所、此度役方有之者ハ其儘被差置、役方無之族ハ引取被仰付候、尤是迄郡奉行支配ニ御座候処、此節より御代官支配ニ被仰付……^⑤

安永三年のこの史料は、「在々重立」＝郷士＝役方の一体化という点で、「郷士制」に一つの転機をもたらしたものとして注目される。郷士が何らかの形で（例えば先にあげた産物方等）役付けされることは必然的に代官支配になることを意味し、また一歩進んで郡奉行段階よりも地方に密着していくことになる。ここに、中後期以降収奪基盤の要である郷

士を農政機構に取り込むことによって、収奪そのものの基盤＝農村とそこからの収納量を確保していく「郷土制」が確定していくのである。その意味で「郷土制」本格化の起点を安永三年に置きたい。その下で、年貢皆済機構としての村政が展開されることになるのである。

尚、御用金（＝御手伝金）賦課という点においてもこの郷土が極めて重要な位置を占めることは言うまでもなく、事実彼らがその大半を担うとともに、中後期以降連年上納している。この場合落は、「子孫迄御捨被成間敷被仰出候」という態度で臨んでいる。

以上安永期迄の農村状況をもとに、この期の農政基調の転換とその方向性を見てきた。端的には本百姓体制の動揺―具体的にはその再生産の自己不完結性、及び一村不完結性―の中の農民再生産の維持及びそこからの収奪強化を、現実にはその再生産を掌握している層を役付きの郷土として設置することによって打開しようとした、津軽藩における領主的対応であったと言える。

二 天明期の状況と課題

（一）天明飢饉の要因

安永末年から天明五年迄の連年の不作、凶作の中で、宝暦以降の領主的危機状況は、収奪基盤の壊滅的打撃を背景として一層深刻化していく。特に天明三年の飢饉は、領主階級が自らを消費階級として認識せざるを得ず、それが故に階級的再生産の道を模索し始めねばならないという藩政の新たな段階の一步として、また生産者階級にとっては、自らの再生産

を維持するという、生きるという原点に立った民衆運動の起点として位置付けることができる。「へ天明に御国はつきて家つぶし果は飢饉に死する卯の年^{③①}」と落首に歌われた卯年飢饉の中で、民衆は自らを拘束する階級的矛盾を背負いつつも、「主人之有之国へ^{③②}」と離散していったのである。

天明三年は、「雪消方茂おそからされ共、初春より八月中旬迄東風吹き続き……六月致ル共東風ニテ寒ク何れも綿入を着なければならぬ寒さであり、「苗ノ生立後レ半夏迄田植る方」もあった。漸く「七月廿七日より出穂」を見るに至ったが、八月に入ると一二日、一二日には「大東風」に見舞われ、特に「十五日之夜霜ふり、十六日之朝は山通り杯は橋之上白く相見へけり、同十八日の朝至ってさむく綿入重ねにてもこらえ兼ね体なり」という東北地方特有の東風「ヤマセ」による冷害年であった。ここでは以下何故に「元和元年之飢饉ト此度之飢饉と同様ニ言人あり、不知事なれハ可否難論、元禄宝暦之飢饉者競論するにたらず^{③③}」と言われ、また実態としても「神武以来なるべし^{③④}」という惨状が現出したのかを考えることによって、寛政改革の前提としての天明期を考察していきたい。この場合、大きくは二点に集約することができる。

第一は、宝暦以降の農村状況が飢饉を導きやすい状態にあったという点である。

諸人凶作なるべしとは少茂心付ず、米直段之宜にまかせ米所持之者ハ米留所を拵へ両浜エ売下ヶ海辺ニ而隠し津出を専にせし間一向米之貯無之皆手ぶりなり、亦人民多く日雇取多にまかせ四番草、五番草迄を七月下旬迄取にかり候間、稲弥増に若がり一向もよふしの

きざしなし^⑧

右の史料の示す所は、(1)貨幣経済の中に農民が巻き込まれることによって、米穀換金がその再生産の主要な位置を占めるに至っていること。そしてその傾向を反映して一方では、(2)農民の手間賃稼傾向が広範化していること、の二点である。(1)は領内米払底を導いた一要因としてとらえられよう(総体としては次に述べる藩の米穀換金手段Ⅱ廻米の中に包摂されてしまう)。(2)は農村疲弊からくる離農化現象Ⅱ再生産における農耕比重の減少である。この背景として次の二点が考えられる。一つは連年の不作であり、一つは宝暦以降の下層農の増加傾向である。「此(天明三年)五六年以前より田畑之高直ニ相成事言ばかりなく、福祐成者はせり買或ハ貸掛致候て請取集致所持候而、福者之方へ立増米之入事如御蔵ニ」^⑨なり、その結果「此(天明二年)四五年以前より人民余り候様相見」^⑩え、ついには天明三年「正月之頃米壹俵貳拾五匁ニ成日々上申候様子ニ而、二月の頃より何となく世上詰候而乞喰夥敷人氣もせまり申候」^⑪という飢饉直前の様相を呈することになったのである。この期の下層農や遊民の滞留現象が飢饉の状況を凄惨化したと考えられる。

第二は、近世的飢饉を規定する、即ち凶作を飢饉たらしめる幕藩制的流通構造に規定された廻米が、飢饉移出として作用したことによる。第一点を飢饉の伏線とすれば、この飢饉移出は「御郡内孕米」^⑫払底を導き、かつそれが農民の一層の困窮化を導いていたという点において、飢饉の決定的要因として位置付けることができる。

抑近年御国元作毛兎角不熟勝之所……一昨年(天明元年)も両都御

廻米莫太ニ而御郡中孕米不足之處、去年半作ニ出来候得共御検見引嚴重ニ而御収蔵ハ六分余之相当、且御家中諸渡米之内御買上、去秋在々下売米御差留ニ而在々所々ニ而不残御買上被仰付、当年も又両都御廻米過分被差登^⑬。

従来の廻米量について詳細は知りえないが、天明二年には、江戸・大坂へ各二〇万俵余、加賀へ三万俵余、これに小納戸米を加えて都合五〇万俵余が廻米されている^⑭。ついで翌三年春には、右の史料にあるように収奪強化を図った上に、「家中諸渡米」、「在々下売米」を買いあげ、更には「諸上納方不残米上納に」^⑮して、天明二年同様、江戸・大坂へ各二〇万俵を廻米している^⑯。また同年七月下旬には民衆の反対をよそに「青森より七千俵余二艘出帆」^⑰している。実高の半分以上を廻米していたわけであり、加えて天明二年が半作であれば、領内米は全く払底したことになる。しかも前述したように、かき集めての廻米であると同時に、天明二年には「皆々所持之榭御取上有て……是迄之榭より計榭ニ而一ツニ付三合余増て入る」^⑱新榭の通用を命じるなど形を変えた収奪強化Ⅱ百姓難儀をともなった廻米であった。

さて、天明三年の皆無作は以上の状況の中で大飢饉へ進展したのであるが、この収奪強化を基盤とした廻米策に対して、天明三年七月以降、領内各地で「在々町々の騒動片時も止時」^⑲なく打ちこわしが展開した。

この中でも特に、七月二〇日の青森騒動(四千人)、同二二日の鰺ヶ沢騒動、同二七日の弘前騒動(二千人)が、その規模、他への影響力、藩への要求内容という点において注目される。飢饉の要因をより明確化する視点に立ってその要求事項を見てみたい。

〔青森騒動〕^{④⑤}

- (ア) 一米留所引取之事
- (イ) 一御廻米明年迄御囲置被下度事
- (ウ) 一御用寄合名主会所ニ而致候儀延引之上古来之通り町奉行所へ
独弁持参之上寄合被仰付度事^④
- (エ) 一家屋敷勝手之替節役銭口銭延引之事
- (オ) 一目明し御止奉願候事
- (カ) 一町年寄二人に被仰付度事、但村井新助一人なり
- (キ) 一諸役人通賄之儀以来御上より御賄銭被下度事

〔鰺ヶ沢騒動〕^{④⑤}

- (ク) 一当御廻米御差留被仰付度事
- (ケ) 一御廻船方三月付引取之事
- (コ) 一舞戸村米留引取之事
- (サ) 一売米壺升五合ニ被仰付度事
- (シ) 一質取候様被仰付度事

〔弘前騒動〕

- (ス) 一兼而上納致置候貯米唯今不残被下置候様相願候^⑤
- (セ) 一〇地広並七千石米御免被成下度^⑤
- (ソ) 一〇貯米御返被成候様、並范方古来之通平范に被仰被成下度^⑤

右の諸要求で、青森と鰺ヶ沢のそれが類似しているのは、ともに廻米積出港であり、打ちこわし主体も町民を中心としたものであったからである。これに対し弘前騒動は、木造（他に金木、俵元）^{⑤⑥}新田の農民が中心となった強訴である。まず、青森、鰺ヶ沢町民の諸要求をまとめてみ

ると次のようになる。

- (1) 廻米を停止し、小売米として安価に売り払うこと。(イ・ク・ケ・サ)
- (2) 米留所を引払い、「私売」を許可することによって米穀の領内融通をよくすること。(ア・コ)
- (3) 町人諸負担の軽減、及び「御上」負担とすること。(ウ・エ・キ)
- (4) その他。(オ・カ・シ)

つまり、「銘々銭を持合せ候得共商米無之餓死ニ及候ニ付家倉を」^⑤打ちこわした町民の要求は、藩の廻米策がもたらした領内米払底による逼塞した状況打開を目ざしたものであったと言える。

これに対し木造新田農民の要求は、農民が藩の仁政論理「領主支配の基本原理そのものに疑惑をもったもの」として注目される。

抑貯米ト言ハ七八年已前も壺反歩ニ付米壺升ツ、百姓高無共も上納致サセ貯置、万一凶歳之節者可為扶助用意之由、然ルに是をふやさんとして春ニ出之利足を懸ケ借渡秋ニ取立納メ、尚又色々動かせし故自然ト不勘定ニ相成……今ハ三分一ならて無之由、兼而百姓共疑惑之處 當時色々之御政道、其上閉塞、於爰憤怒を生し願申出シと聞得候右米（貯米）へ二割か利付にて夫喰糲等の貸付へ相廻し置候、初は郷蔵へ斗置所々の重立候者共取扱候所、後代官方へ御收納同然に御蔵へ相斗候^⑤

明和五年、藩は「拾石三斗米」の過上納を廃止しているが、これは名目を変えて、安永九年からの「高拾石ニ付米穀壺斗七升余」の過上納による「在方より壺ケ年成米七千石宛上納」^{⑤⑥}と、「七八年已前も」^⑤の貯米上納として継続されている。つまり、過上納の軽減と仁政の両面を打ち

出すことによってこれまでの収納量を確保しようとしたわけであるが、農民はその仁政論理を逆手にとった形で自らの権利を主張している。これは、貯米が本来のあるべき姿を失い、結局は収奪策の手段として機能し、またそうせざるを得ない藩に対する階級的要求によって、自らを領主階級に対峙したことになる。宝暦以降収奪強化策によって表面化した仁政の破綻は、天明三年飢饉を契機として、被支配階級に暴露される形で階級的対立へと進展していったのである。しかし、これら諸要求は、領主的対応として自らの論理に組み込むことのできるものを除いては、全てその暴力機構によって退けられることになる。

(二) 飢饉状況と藩政の課題

これまで、凶作を飢饉化した諸要因について宝暦以降の諸側面より見てきたわけであるが、次に飢饉状況を見ることによって以後の藩政の課題を明確にし、寛政改革へとつなげていきたい。この場合、以下の四点を考へることができる。耕作力の低下、荒地の増大、収奪基盤把握の低下、治安の悪化の四点である。

第一点の耕作力の低下については、次の三要因があげられている。

要因の一は、在方人口の極端な減少である。この期の人口は約二五万人であり、三分の一が死亡している。しかもその内容を農村状況において見る時、次のような状況を示すことになる。

村々ニハ村潰ニなりし所多有之内、後海組江沢村、目屋の沢、白沢村、村人モ活命之者無之死絶シト也、屯人二人活命有之村所者村ノ家ヲ不残焼払隣村ヘ引取、三四人モ活命有之村所ハ屯人住居シテ武

三軒も建置村号ヲ続キ居候也、尤大方ハ女勝ニ活命ス、就中男ハ老若共に疲れ死果、女共而已多残、死残り家拾軒之内に男女揃へしハ七八軒外式三軒ハ寡にて候也^①

つまり、(1) 村潰れ、(2) 女勝、(3) 家族数の減少という状況である。村の存在は有名無実化し、同時に耕作規模も必然的に縮小し、加えて男子の減少がそれを助長している。隣村引取や一人住居によって漸く最少限の耕作力・村の存続を維持していたのである。また、村潰れの意味する所は農政に大きな影響を与えることは言うまでもない。特に藩が、「御國中一統之大凶作ニ付、田畑共作物御收納皆拾被仰付、并屋敷成諸郷役共御免被仰付」れたために、「平賀六ヶ組赤石組之内ニ者種枳位之御收納御取立被仰付候而茂宜作躰之所^②」と、新田村との地域的隔差がより拡大していったことは、藩士土着期における在宅所の決定にも尾をひくことになる。

次に要因の二として、他国への離散があったことも見逃がすことができない。「躰御郡内孕米無之、町在相応之族へ御用金等被仰付、中国秋田辺より御買越米可被遊由ニ而」それぞれ派遣はしたものの、「冬路に相成海陸共取賦難成殆と御救方も不被及空しく明春の船手を待斗に候^③」という中で、わずかに「冬の内に秋田仙北より御買越米駄付にして来れども、御家中の御扶持米さへ不足なれば町在江御手当といふは少もなし^④」という状況では、「主人之有之国」を求めたのも当然の成り行きと考えられる。特に「向方(秋田)七歩餘の作合に而五七人各身の有付も出来候^⑤」とか「仙台領に新田有て右之所へ行けば能^⑥」といった風聞が、この状況を一層激しいものとした。また、その勢いが次の史料によって知ら

れる。

高無小者は言に不及大駄の百姓も田畑家屋敷も打捨親兄弟妻子引連銘々着替を背負ひ或は老人子供を馬に乗せ一日に五十人三十人、後には二百三百と毎日秋田へ行者引も切らず、凡八月中旬より十一月末迄他国へ行者一万余人、初ハ三御関所御差留被仰付候得共日々五百人三百人の儀御政道にも難及、後は御構なく人馬共に勝手に罷出候打ちこわしによる鬭争が離散へと進展し、かつそれが一時的離散でない点にこの期の領主的危機の深刻化を見ることができ、しかもそれを領主階級が制しえないところに収奪基盤の喪失を見ることができ。尚、この離散現象が更に地域隔差を拡大していったことは言うまでもないことである。(表e f 参照)

要因の三は、農耕形態にかかわる問題である。農業人口の激減、遊民化の一方で、既にふれてきたように、富豪層による土地集積は一層展開することになる。特に食糧難を反映して、「漬物斗一椀と小家一軒取替候様成事に而、大駄の家財十匁と成不申由、田畑家屋敷渡申度と而只五匁にも受取申者無之」という状況は、よりその傾向を助長していたと考えられる。つまり、この結果生じた富豪層の土地経営形態は、多くの仮子の供給を必要とするに至ったことである。既に質入れする土地をも失った下層農の存在形態は、賃稼ぎを目的とした農業労働への従事が基本となるわけである。この意味で富豪層は手作地主としてその経営内容を拡大していたと言え、逆に下層農は日雇取、家内奉公人としてその労働力供給市場を形成していたと言える。先に見た芳賀家の金借証文の内容が、土地の買取りを基本としたものであったことも、津輕藩におけ

る地主の存在が、仮子をかかえることによって成り立つ手作地主としての存在であったことを、ある程度示しているとも考えられるわけである。ところが、飢饉後の百姓数の激減という労働力供給市場の動揺によって、仮子給銀との関係で、手作地拡大の限界、そしてその縮小再生産を余儀なくされる方向が生じてくる。表gは、一俵あたりの米価と仮子給銀をグラフ化したものであるが、天明三年の無給銀と同六年以降の急激な給銀上昇を指摘することができよう。天明三年の無給銀は、飢饉状況の中で富豪層自体が仮子労働力を全く必要としなかったこと、あるいは仮子が自ら富豪層の傘下に入ることによって再生産しようとしていたためと考えられるが、いずれにしろこれ以前の段階では、給銀は需給関係において雇用者側に少なくともその決定力の大半が存したと考えられる。しかし、米価が一定の落ちつきを見せ始めた天明六、七年頃から、この関係が逆転するようになる。特に同六年は豊作年でもあり、次第に廃田開発や仕付高が増えてきた年にもあたり、漸く農村自体が立ち直りを見せ始めた頃である。

在々仮子共並百姓之子供等伊達嶋伊達染之着物着其外花染之觸伴染式廻し三尺帯風呂敷手拭之類迄色嶋高直成を相用、当盆中も友子共座付下駄等相用得甚無用之候費多有之候、家々亭主気毒存候得共時行風俗ニ相成意見等も及兼候由、其上難飯給せ候得ハ手間雇之者其方へ一切參不申候よし、依白飯ニいたし間夕には酒等振舞却而百姓共より小者雇之者ニ手を置頼候触相成り候由、前々ハ仮子給銀六七拾目ニ相抱候処此節百貳三拾匁ニ漸差置候由、依之百姓共人多抱候義成兼年々作高相減候由^⑩

つまり、家内労働力を大きく越えた土地経営もたらしめたものは、仮子下抱による手作経営であり、天明飢饉による労働力供給市場の動揺が仮子主導たる給銀決定にまで及んだと考えられるのである。右の史料はその間の仮子の動向をよく示している。こうして飢饉状況を経た百姓経営は、これまで津軽藩年貢収奪基盤の中核を構成してきた富豪層が「年々作高相減候」という状況に陥ったことによって、縮小再生産の方向へと向かっていくのである。その意味で耕作力の低下を導いた要因の一つと考えたい。

その他、時疫流行や馬数の激減もまた要因として考えられる。特に馬は、表aで見たように、田畑所持者は必ずといってよい程保有しており、農耕手段として極めて重要な位置を占めていたと考えられる。斃馬もさることながら、悲惨な食糧難の中で、「彼も是も牛馬を第一の食事と致した結果の激減や、換金手段としての他領移出によって減少したことは、四年以後の耕作力の低下に大きくかかわってくることになるのである。

第二点は、荒地の問題である。（表h参照）「田野曠々として郷人なく白骨死人爛草を埋ミ申候」という言葉に象徴されるように、これは第一の耕作力の問題とも深くかかわってくる問題であるが、特に収納量との関係で飢饉後課題化されてくる。端的には、仕付高の低さからくる損毛率の高さである。具体的にその内容を表iにおいて見ていきたい。

天明四年は早魃による大凶作であり、仕付高と損毛率の関係はつかみにくい^③が、天明六年六、七分作、同七年大豊作、同八年豊作という作高に対し、損毛率はそれぞれ六六・一%、五四・〇%、六二・六%と極めて高くなっている。これが仕付高の低さからくるということは異論のない

所かと考える。つまり、天明四年の仕付高が五〇%、翌五年が五二%^④と、毎年民力の回復によりわずかな自然増加はあるものの、「凡広須、木造向新田に而田方三千餘町歩御座候内、当年仕付高六ヶ一に而漸五百町歩斗ならで無之候、二千餘町歩荒に相成」^⑤っている状況は克服しがたいのであり、従って積極的廃田対策が必要とされてくることになるわけである。ここに第一の耕作力の低下が現実的課題として浮かび上がってくることになり、両者の一体化が見られることになる。

第三点は、右の課題遂行の基本となる、人別把握・土地把握の問題である。天明飢饉による人口の減少、住居移動、及び村潰れ等の現象は、極めて混乱した農村状況を現出したことは言うまでもない。とりわけ、豊作や仮子給銀上昇等により、在方が「賑々敷」^⑥になったにもかかわらず、「只々御家中方而已御難儀」^⑦となる様相を呈するに及んだことは、年貢収奪方法そのものが問題とされることになる。この意味での収奪基盤の把握は、藩にとっては目前の利害に大きくかかわってくる問題であり、従って緊急の対策が必要となってくる。

辰ノ年（天明四年）荒地当年之年（天明六年）より段々開発断有之ニ付御穿鑿有之候得共、不分明故へ村々ニ而地引役と言を御立被成、庄屋五人組並地引役之者迄於代官所誓紙ノ血判御取被成候、然共不分明候由、此地引役忝村々人宛位有、苗字不名乗大小御免なく庄屋同様ニ御座候、^⑧

藩はまず土地把握を企図し、村毎に地引役を設置したことが知られる。しかし、結局の所「不分明」であったのは、一つには地引役の性格が「庄屋同様」であり、農民同志の相互規制を基本としていたこと、一つに

は荒地開発そのものが人的把握をとまなわなかったが故に、収奪基盤に組みえなかったためと考えられる。

農政機構の改変と収奪基盤の再編成が、ここに課題とされるに至る。
第四点は、治安の問題である。

青森の打ちこわし以後、「富人」や「有徳之者」に対しての打ちこわしは領内各地に及んでいるが、これらの諸行に関しては枚挙にいとまがない。「盗賊火災中々言語筆紙ニも」^⑧尽くしがたい程であり、「少し貯之有之者ハ焚火に足を置きし心地せり、此節我より下部之小者を恐るゝ」と言ふばかりなし、都而擲れ或ハ川に流されて殺さるるを見れば人の命は塵芥よりも軽き節」^⑨となり、「種々様々の境界全く人間業にはあらず浅ましき世の有様」^⑩となっていた。この場合、藩にとって問題となるのは、「少し貯之有之者」が、あながち富豪のみをさすものではなく、翌年仕付を行いうる百姓をも含んでいたことであろう。既に述べたように、耕作力減退の中で仕付高確保は藩の主要な課題なのであり、漸く延命した彼らが危機状況に陥ることは、藩の危機状況もまた深刻化することを意味するからである。

天明三年、藩は「御用心向嚴敷」するために「両組并御中小性御徒等数十人忍廻」^⑪に任じ、青森では町同心の数をふやしている。^⑫また良民に対して、捕えた賊を勝手に処罰できる「私刑」を許可したともされており、^⑬藩でも手のつけようのなかったことが窺われるのである。

おわりに

津軽藩寛政改革を展望するにあたり、本稿では、宝暦以降の農村状況

と天明飢饉の内容を検討することによって、藩のかかえた諸課題を提示してきた。改革が蓄積した社会変動への集中的表現である以上、津軽藩の場合、天明飢饉対策が直接の改革要因ではあるが、それ以前の状況が大きく影響していることが本稿を通して再確認できたと思う。即ち、第二章二節であげた天明飢饉の四つの課題は、宝暦以降の諸現象の上に設定せられたものであり、それが、総体として階級支配の弛緩を導いたことへの対応が、寛政改革としてあらわれるのである。

しかしながら、ここで寛政改革における諸政策を藩政の中に体系的に位置付けることは、本稿の段階ではまだ不十分である。「はじめに」において述べたように、本稿は特に、収奪基盤の変容に着目したものであり、同時に中後期の農村状況の把握を目指したものである。

従って、今後に残された課題は重要であり、別稿を期すつもりであるが、特に改革断行を直接に動機づける藩財政構造と実態の検討、とりわけ藩士財政の窮乏が、借上や蔵元からの廻米強制とどう結びつき、どう藩財政の窮乏とかわってくるのかという視角が見のがせない。寛政改革最大の施策である藩士土着策は、端的には、藩士の給地住居による地方知行制であり、手作りⅡ農耕従事が前面に押し出されつつも、村役人を媒介とした年貢収奪が、地頭直収納による収奪に切り換えられることを意味しており、従ってそれは、藩士財政の自立を一定程度目指したものであったと推論されるからである。即ち、本稿で示した農村状況と藩財政窮乏の二つの打開が、藩士土着策として結実したと考えている。その意味で、毛内有右衛門や赤石安右衛門、菊池寛司らの改革意見書の検討も、今後の重要な課題である。

〔付記〕

本稿は、一九八〇年七月二七日、弘前市立図書館での藩政史研究会において報告した内容の一部をまとめたものである。会員諸氏から貴重な発言をいただいた。お礼申し上げたい。また、本稿作成にあたって、弘前市立図書館、平賀町郷土館、芳賀豊太郎氏、浅倉有子氏に資料を提供いただいた。記して感謝したい。

註

- ①『尾崎村誌』八九頁所収。
- ②『中里町誌全』によれば、「高無百姓というのは九斗九升九合以下の収穫高を得る小百姓のこと」（八八四頁）としているが、表aには適用されない。
- ③三千石村「佐々木家文書」、『板柳町郷土史』一〇一頁所収。
- ④『藩日記』宝暦三年六月二七日条。
- ⑤「越石」が本来「出作」を意味するものでないことは、『地方凡例録上』（二〇四頁、近藤出版）に示されているが、表aの史料では「出作」を意味している。
- ⑥みちのく双書第二二集『平山日記』宝暦四年条、二八七頁。
- ⑦例えば、「私（杉館村基助）所持仕候惣左衛門田方六人役、右錢以元利ヲ請人罷出急度永代ニ売渡可申候」（明和五年）や、「私（館田村半四郎）田畑永代ニ売渡」（安永四年）等に示されている。
- ⑧『平山日記』三八五頁。
- ⑨「要記秘鑑」明和八年五月二三日条、歴史図書社『青森県史（二）』五五一頁所収。

⑩『平山日記』三六六頁。

⑪種々の物入や不作等による次年度廻米を約諾した借金申入という借金廻米は、廻米量の減右等によって、ついには借金返済のための廻米として、蔵元から強制されることになっていく。次の史料に見えるように、廻米を唯一の頼りとした借財を重ねていく藩財政の悪循環構造が現出したわけである。そして廻米の実質的機能は藩の手から離れ、形骸化した廻米行為のみが藩の手に残っていく。ここに藩は廻米量確保を、必然的にしかも精力的に行わざるを得なくなるのであり、従って、収奪強化の原因を蔵元による廻米強制に求めることができると考える。

在々之者共先年御手繰壹万石御用立米去年（宝暦一年）まで御利足米被下置候間、当年も可被下置筈に候得共、何連茂存知之通近年御手繰方至而御難洪之上、去年江戸御国品々過分之御物入有之、一旦江戸上方諸銀主出金を以御凌相立候得共、右御約諾御廻米不被差登候而者御取組破却ニ相成候訳に付、無勘当年別段御用立米も被仰付候得共、右御不足程之御都合及兼色々御繰合を以先御廻米之儀者相済候得共、当作方之儀も、稔相応と申内植立後数百町虫付殊に土用中暑気薄ク思召之外御損毛も有之、旁以御不足相重り、右御新借之御手返にも御行届難被成程之儀有之候間、右壹万石元利御返済御手繰成兼候に付、当年元利共及御断候」（『藩日記』宝暦二年九月一六日条）

- ⑫『平山日記』宝暦四年六月条 二八八頁。
- ⑬同右、安永元年条、三五九頁。
- ⑭同右。

⑮、⑫に同じ。

⑯『平山日記』安永三年条、三六九頁。

⑰、⑬に同じ。

⑱、⑯に同じ。

⑲『平山日記』三四三頁。

⑳ 同右、一八八頁。

㉑ 正徳三年は百石につき二五俵、宝暦八年は三分の一の借上となっている。（『平山日記』同年の条）

㉒ 次の史料に見えるように、家中借上は享保末以降連年数ヶ年単位でくり返し行われている。特に宝暦以降は、廻米と深いつながりをもっていることが、「毛内有右衛門筆記」（市立図書館蔵）などによって知られる。

尚、筆者は、家中借上の延長上に、しかも最終的施策として知行蔵入（安永三年）が位置付けられると考えている。詳細は別稿を期したい。

御家中当年（宝暦四年）迄二十六七ヶ年の間御借上米御取立、尤も五年三年の限を被仰出候故其年限を相待居候處、又々御借居其上半知に被仰付是又三ヶ年の限被仰出、何れも此年は必御返と存し如何様とも相続致居候處、兎角御沙汰も無御座候、（「毛内有右衛門筆記」宝暦四年閏一二月一五日条、『青森県史（二）』四九七頁）。

㉓ 例えば、『平山日記』二七四頁、二七八頁。

㉔『平山日記』安永三年一二月条、三六八頁。

㉕「封内事実秘苑」『五所川原町誌』四二頁。

㉖『平山日記』二九二頁。

㉗ 同右、三〇七頁。

㉘ 同右、三六八頁。

㉙ 例えば、大光寺村郷土芳賀家「由緒書」（『大光寺史』二九七頁）、岩館村郷土斎藤家四代基助の項（斎藤馨『岩館斎藤家盛衰記』二八頁）に、中後期調達金の状況が記されている。

③①『平山日記』宝暦四年条、二八四頁。

③②「天明凶荒録」（青森県叢書第七編『南部・津軽藩飢饉史料』三一頁）。

③③ 藤田小三郎家「家記」天明三年条。この「家記」には、宝暦元年―天明四年迄、天明四年―寛政三年迄の二冊があるが、引用は年次を以て示す。以下単に「家記」と記載する。市立図書館蔵。

③④『平山日記』天明四年条、四一五頁。

③⑤「家記」天明四年条。

③⑥「天明凶歳日記」（青森県叢書第七編『南部・津軽藩飢饉史料』二八八頁）。

③⑦、③⑧に同じ。

③⑧『平山日記』天明三年条、四〇四頁。

③⑨ 同右、天明二年条、三九八頁。

③⑩ 同右、天明三年条、四〇三頁。

③⑪「天明凶歳日記」二八八頁。

③⑫「家記」天明三年七月二一日条。

③⑬ 同右、天明二年六月一〇日条。

③⑭「天明凶歳日記」二八一頁。

③⑮ 同右。

③⑯「工藤家記」（みちのく双書第七集『津軽歴代記類』二三二頁）。

- ④⑥『平山日記』天明二年条、三九八頁。
- ④⑦「天明凶荒録」三〇一頁。
- ④⑧「工藤家記」(『津輕歴代記類』二二二頁)。割注に、「米留とハ、所々在々より米穀売出に來る人馬を改め凡て取押へ私売を禁ずる役所を建るを云」とある。尚『平山日記』同日条(四〇五頁)の七ヶ条も参照されたい。
- ④⑨同右、二二二頁。
- ⑤①「家記」天明三年七月二六日条。
- ⑤②『平山日記』天明三年条、四〇八頁。
- ⑤③「天明凶歳日記」二八三頁。
- ⑤④「家記」天明三年七月二六日条によれば、金木、俵元新田農民も加わったとある。
- ⑤⑤「工藤家記」(『津輕歴代記類』二三〇頁)。
- ⑤⑥、⑤③に同じ。
- ⑤⑦、⑤②に同じ。
- ⑤⑧『平山日記』安永九年条、三八八頁。
- ⑤⑨「天明凶歳日記」(二八三頁)では、「十一ヶ年以前より」となっている。
- ⑤⑩『藩日記』天明六年一月二四日条に、「領内拾七万人余之扶助難相成」とあり、死者八万人余を加えると二五万人となる。
- ⑥①「家記」天明四年条。
- ⑥②『平山日記』天明四年条、四二六頁。
- ⑥③「家記」天明三年条。
- ⑥④「天明凶歳日記」二八八頁。
- ⑥⑤『平山日記』天明三年条、四一九頁。
- ⑥⑥「天明凶歳日記」二八一頁。
- ⑥⑦『平山日記』天明三年条、四一六頁。
- ⑥⑧、⑥⑦に同じ。
- ⑥⑨「天明凶歳日記」二八六頁。
- ⑥⑩例えば『平山日記』天明四年条(四二五頁)には、「諸色売買ハ至而下直、猶又田地耆反歩ニ付五匁三匁、或ハ人に寄り近所出入之者江粥杯給せ候上ニ少々錢を遣り、家屋敷田畑之反別証文取候而所持せし族も間々相見得候」などである。
- ⑦①『平山日記』天明八年一月二一日条、四五四頁。
- ⑦②「天明凶歳日記」二九四頁。
- ⑦③「佐藤家記」(『津輕歴代記類』二四三頁)。
- ⑦④『平山日記』天明六年条、四三九頁。
- ⑦⑤同右、天明七年条、四四四頁。
- ⑦⑥同右、天明八年条、四五一頁。
- ⑦⑦「田畑不熟損毛御届一件」天明四年条。
- ⑦⑧「天明凶歳日記」二九六頁。
- ⑦⑨『平山日記』天明七年条、四四六頁。
- ⑦⑩擬今年豊作ニ相納り米耆俵廿三、四匁ニ而殊ノ外世上賑々敷、諸色高値ニ候得共諸民村々外花見を好み諸品相調候間、商之有之事夥敷町々も繁昌相成申候、諸職人並日雇取も弥払底ニ而、猶在方飯子之儀ハ上ニ付三百目余夫より式百四、五拾目以下小者等迄式百目内外御座候、誠ニ加様之賑々敷事ハ前代より多く有間敷候と思ひ候なり、

只々御家中方而已御難儀被成候而何共気毒ニ思申事ニ御座候、

⑦⑨ 同右、天明六年条、四四〇頁。

⑧⑩ 「家記」天明三年条。

⑧① 『平山日記』天明三年条、四一八頁。

⑧② 「天明凶歳日記」二八九頁。

⑧③ 「家記」天明三年条。

⑧④ 『藩日記』天明四年四月二二日条。

⑧⑤ 『中里町誌全』二四六頁。

(田名部高校大畑分校教諭)

表 〇 安永三年八月 大光寺組平田森村戸数人別調 (『尾崎村誌』より作成)

	農民名	総持高	持高内越石	持高内作人付	当 作	分 家	鳥 数	備 考
百姓	清三郎	100 ⁵ 085	石	51 ⁵ 051	石		3 ^匹	他村からの飯子1人
"	彦左衛門	65.496		20.495	報恩寺持 18.401		3	五人組頭
"	清兵衛	60.307		21.547			1	庄屋(役高30石)
"	七兵衛	53.933		21.640			3	五人組頭(役高15石)、同村高無弥兵衛を飯子とし
"	仁衛門	18 ⁵ 875	18.813				1	五人組頭
"	甚十郎	22.791			13.032		2	同村日置作衛門一家(3人)を飯子とし同居
"	惣次郎	20.752					1	
"	長四郎	18.777	14.941				1	
"	与衛門	5 ⁵ 957	5 ⁵ 615				2	
"	吉五郎	16.038	14.738			彦左衛門分家	1	彦左衛門養子
"	長 八	15.369	12.310				1	五人組頭
"	与三郎	13.570	13.570				2	五人組頭
"	弥惣司	12.606	6.200				1	
高無	専太郎	12.320	12.320			七兵衛分家	1	七兵衛次男
百姓	喜三郎	11.380					1	
"	福衛門	9.858	9.858				3	
"	清衛門	9.252					1	
高無	万太郎	8.710	8.710			清兵衛分家	1	
百姓	彦 作	8.450					1	
"	佐五兵衛	7.956					1	
高無	幸 吉	5.890				彦左衛門分家	1	彦左衛門弟
百姓	与兵衛	5.430			5.900		1	
高無	松	4.104	2.945			佐五兵衛分家	1	佐五兵衛四男
"	藤衛門	2.647	2.187		清三郎持 8.883		1	
"	左 吉	1.900				長四郎分家	0	
"	七三郎	1.180			清三郎持 6.100		1	
"	彦次郎	畑方1反2畝			与三郎持 8.973		1	
"	義兵衛	0			彦左衛門持 10.611		1	
"	清次郎	0			清三郎持 6.876		1	
"	長五郎	0			長八持 4.101		1	昨年迄所持2畝居村長八に譲渡当年分持、三男他村へ奉公
"	仁衛門	0					0	小・二男他村へ奉公
"	弥兵衛	0					0	弥兵衛は居村七兵衛へ奉公、小・男他村へ奉公
"	長 七	0					1	
	計	513 ⁵ 634 田方1 ⁵ 5 ⁵ 1畝10 ⁵ 歩 畑方 1 6 02	122 ⁵ 207 畑方 4 ⁵ 02 ⁵ 歩	114 ⁵ 733	82 ⁵ 877	6 軒	41 ^匹	

注1) 百姓・高無は、ともに五人組を構成している。

2) 百姓・高無は、ともに屋敷を所持している。

3) 上・当・作とは、当年分小作関係にあることを示す。

表b 安永三年 平田森村階層構成 (『尾崎村誌』より作成)

石高(石)	百姓(人)	高屋(人)	計(人)	%	庄屋	五人組頭
100 ^石 ～	1		1	3.0		
50～100	3		3	9.1	1	2
20～30	3		3	9.1		1
15～20	4		4	12.1		1
10～15	3	1	4	12.1		1
5～10	5	2	7	21.2		
0～5		5	5	15.2		
0		6	6	18.2		
計	19(人)	14(人)	33(人)	100.0	1(人)	5(人)

表C 安永三年 平田森村日雇取層内容 (『尾崎村誌』より作成)

農民名	奉公先	屋敷	五人組	備考
久米次郎	杉沢村三之助	明屋敷		
太郎	黒石前町柳屋藏助	"		
作衛門	居村甚十郎	"		妻子共同人方へ同居奉公
福助	弘前和徳町松之助	"		
吉	秋田表	〇	〇	「干今帰村不仕候」

注) 〇印は屋敷住居、五人組構成員を示す。

表d 芳賀家の土地集積状況

年代	証文数	%
寛保 3	1	1.2
宝暦 6	1	16.9
14	13	
明和 3	1	32.5
4	1	
5	24	
7	1	
安永 2	16	36.1
3	1	
4	11	
5	2	
天明 2	1	8.4
3	4	
5	1	
6	1	
寛政 1	1	3.7
8	1	
(寛政、年不詳)	1	
文化 5	1	1.2
計	83	100.0

(平賀町大光寺「芳賀家文書」)

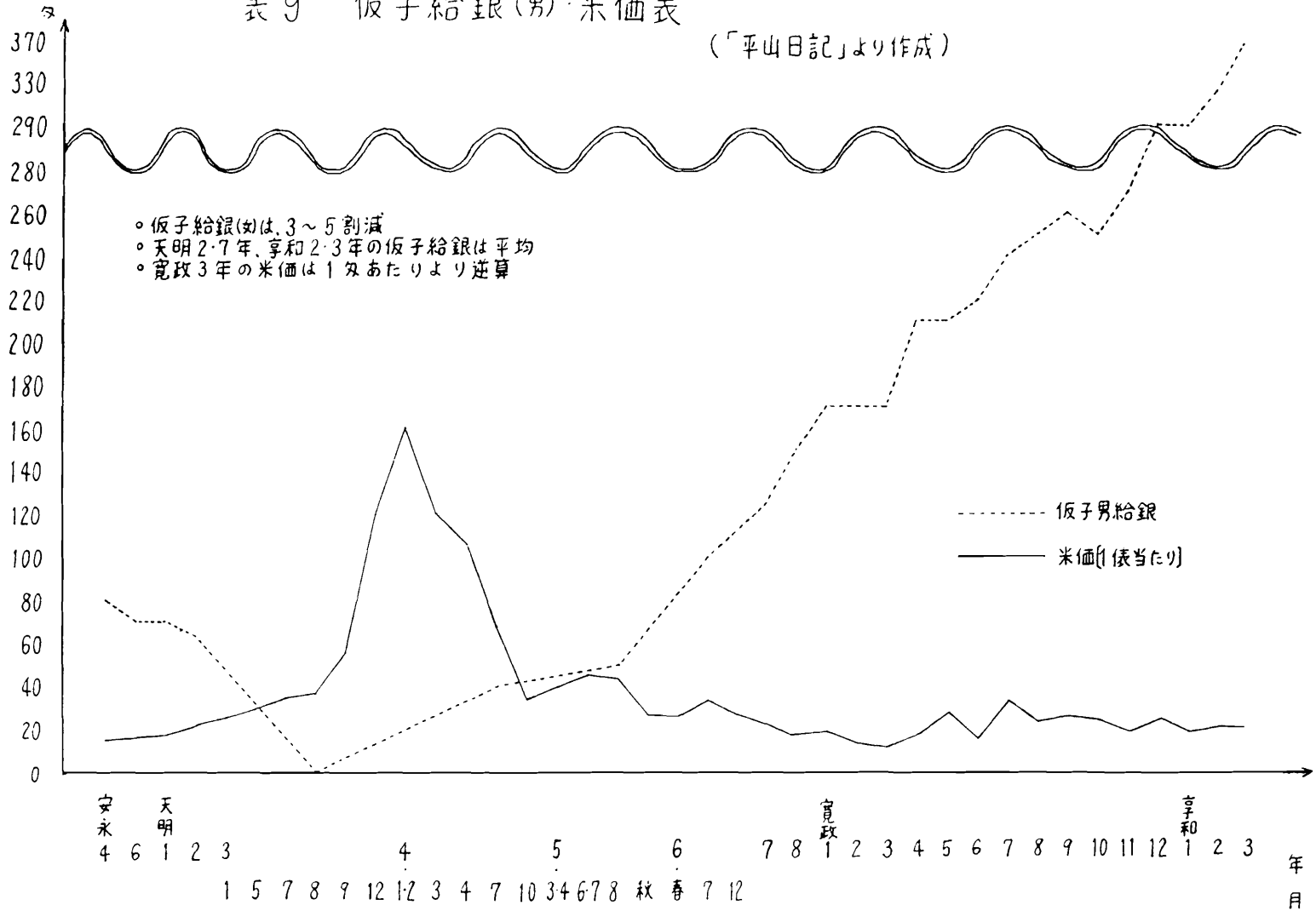
表e 天明飢饉状況

対象年月	内 容	出 典
天明3年12月	餓死 18,000 余人 行倒れ 2,000 余人 他国行 10,000 余人 於非小屋 800 余人	「天明凶歳旧記」
天明3年9月	死者 81,702 人 内男 46,882 人 女 34,796 人(???) 右之内 於弘前町々 4,496人 於九 浦 4,503人 於施行小屋 3,026人 於在 々 69,677人	「藩日記」 天明4年6月30日条
同 4年6月	斃馬 17,211 疋	「津軽歴代記類」
天明4年	明家 10,000 余戸	「平山日記」

注) 宝暦年中調(除黒石領) 人口 222,280 余人
戸数 32,810 余戸
(「平山日記」P333より作成)

表9 飯子給銀(男)・米価表

(「平山日記」より作成)



表h 天明四年 津軽郡植付状況

田 方	総地積	* 27,765町8反2畝16歩			
	稲作植付	11,873	2	5	25
	稗 植付	2,019	2	0	23
	豆 植付	67	8	0	08
	(植付小計)	13,960	2	6	26
	荒地	13,805	7	7	23
畑 方	総地積	* 12,400 0 0 11			
	仕 付	4,708	9	1	19
	荒地	7,610	8	1	02

注) *印は、記載値である。
(「平山日記」P427より作成)

表i 田畑損毛高

年 次	損 毛 高	比 率
安永5年	148,311石3斗1升4合	61.2%
6	62,682 5 5 8	25.9
7	129,020 5 1 4	53.2
天明3	233,042 5 2 0	96.2
4	198,690 5 0 0	82.0
5	188,761 0 3 6	77.9
6	160,285 1 4 0	66.1
7	130,870 9 0 0	54.0
8	151,639 1 8 0	62.6
寛政1	157,866 2 5 0	65.1
2	72,211 9 1 5	29.8
3	135,717 9 7 0	56.0
4	69,541 3 0 9	28.7
5	127,403 8 3 0	52.6
6	55,920 0 9 8	23.1
7	121,973 2 2 4	50.3

注) いずれも総高242,353石5斗2升の内の損毛

- ・天明7年以降は損毛率より逆算
- ・天明1・2年は記載なし

(「田畑不熟損毛御届一件」より作成)

表f 天明3年 諸組作毛状況

庄名	組 名	田	大田
平賀庄	大光寺	30%	40%
	猿賀	30	40
	尾崎	20	30
	大和	20	30
	堀徳	20	30
	堀越	20	30
鼻和庄	藤代	10	40
	高杉	10	40
	駒越	10	20
	赤石	10	10
田舎庄	田舎館	10	20
	赤田	10	20
	増館	10	10
	藤崎	10	10
	相木	10	10
	常盤	10	10
	広田	10	10
	浪岡	10	10
	浦町	10	10
	横内	10	10
	飯詰	0	0
	金木	0	0
	俵元	0	0
	広須	0	0
	木造	0	0
	油川	0	0
	後浮	0	0

注) 天明3年9月16日郡奉行調より作成
(「津軽歴代記類」P234)